

少年院における性非行防止指導の現状と課題 —効果検証を通じて見えるもの—

佐々木 正輝

矯正研修所効果検証センター効果検証官補

一 はじめに

少年院では、本件が性非行^①に該当する者又はそれには該当しないものの、性的な動機によって本件非行に及んだ者（以下「性非行少年」という）を対象として、性に対する正しい知識を身に付けさせるとともに、自己の性非行に関する認識を深め、性非行をせずに適応的な生活をする方法を身に付けさせることを指導目標として、特定生活指導において性非行防止指導が実施されています。

同指導については、前身となった矯正教育プログラム（性非行）の開発段階から効果検証が計画されており、平成二六年度の指導の本格実施以降、平成二九年の性非行防止指導に係る調査（以下「性非行調査」という）の改訂を経て、複数年をかけてデータの収集等が進められてきました。

矯正研修所効果検証センターでは、令和二年度、これまでの研究結果を踏まえた総括的な分析・検証を行いました。本稿では、性非行防止指導の現状や近年の取組、また、分析・検証の結果、明らかとなった性非行防止指

導の指導効果と今後の課題等について御紹介します。

二 性非行防止指導の概要

性非行防止指導は、中核プログラム、性非行に関連する要因に焦点を当てた周辺プログラム、更にフォローアップ指導を組み合わせた複合的なプログラムです。大きな特徴として、標準プログラムに加え、知的能力に制約がある者を対象とした特別プログラムの二種類のプログラムが用意されており、特性に応じた指導が可能となっている点が挙げられます。両プログラムには、中核プログラム及びフォローアップ指導において用いるワークブック教材と周辺プログラムの一部に違いがあります。

(一) 標準プログラム (J-COMPASS)

標準プログラムの中核プログラムでは、ワークブック「J-COMPASS」を用いた指導が行われます。J-COMPASSは、①内発的動機付けを重視すること、②少年が本来持つ力を伸長すること、③マインドフルネ

スの理論を用いることを特徴としており、少年自身が自己理解を深め、非行に代わる有効な行動を活性化させることを目的としています。

(二) 特別プログラム (JUMP)

特別プログラムの中核プログラムでは、ワークブック「JUMP」を用いた指導が行われます。JUMPは、認知行動療法の考え方を参考としているほか、①知的能力の特性に配慮していること、②強みを生かした長期的な成長を見据えていること、③生活場面との関連を重視していることを特徴としており、少年自身が性非行を含むこれまでの生活を振り返り、認知や生活上の課題等に適切に対処するためのスキルの習得と、「なりたい自分」に向けて行動する習慣を身に付けさせることを目的としています。

(三) 重点指導

性非行防止指導は、全国の少年院で実施されていますが、特に重点的かつ集中的な指導を要する者は、指定を受けた施設（北海少年院及び福岡少年院）における指導（以

表 少年院在院中の性非行調査内容及各下位尺度得点の変化

尺度名	測定している内容	下位尺度名	望ましい変化の有無	
			○	×
感情制御困難性尺度 (日本語版感情制御困難性尺度 (J-DERS))	不快な感情に気付いたり、効果的に対応したりすることへの困難・障害に関する尺度。高得点になるほど感情統制を困難に感じる程度が強いことを示す。	感情自覚困難、 行動統制困難、 制御方略の少なさ	○	×
		感情受容困難	○	×
共感性尺度 (多次元共感測定尺度 (IRI))	共感を多角的に測定する尺度。高得点になるほど共感的な態度が強いことを示す。尺度の一部を使用。	視点取得、 共感的配慮	○	○
対人スキル尺度 (ENDCOREs)	対人スキルを多層的に測定する尺度。高得点になるほど対人スキルが高いことを示す。	自己統制、表現力、 自己主張	○	○
		解読力、他者受容、 関係調整	○	×
信頼感尺度	自他に対する信頼感を測定する尺度。高得点になるほど自他に対する信頼感が強いことを示す。尺度の一部を使用。	自分への信頼、 他人への信頼	○	○
体験の回避尺度 (日本語版 Acceptance and Action Questionnaire-II (AAQ-2))	体験の回避 ⁽¹⁾ を評価する尺度。高得点ほど体験の回避傾向が強く、低得点ほどアクセプタンス ⁽²⁾ が進んでいることを意味する。	下位尺度なし	○	-
マインドフルネス尺度 (FFMQ)	自分の感情や感覚と適度な距離を置きながら、それらを受け入れ、その時々々の自然な状態を保つことができる心理状態を測る尺度。高得点になるほどマインドフルな状態に近づいていることを示す。	観察すること、 気付きながらの行動	○	×
		反応しないこと、 判断しないこと、 表現すること	○	○
性非行少年の改善意欲の 乏しさ尺度	性非行少年の改善意欲の乏しさを測定する尺度。合計得点が高得点になるほど改善意欲が乏しく、処遇ニーズが高いことを示す。旧効果検証班オリジナルの尺度。	少年院処遇に対する 意欲の乏しさ、 性非行をやめること への抵抗感、 自分らしい生き方の 欠如	○	○
人生全般における ポジティブな心理機能尺度 (心理的well-being 尺度)	心理的な健康度や前向きさを測定する尺度。高得点になるほどポジティブな心理機能が備わっていることを示す。	人間的成長、 人生における目標、 自己受容、 環境制御力	○	○
		自律性、 積極的な他者関係	○	×

※ 各心理尺度のいずれにおいても受講前調査時から出院時調査時にかけて望ましい変化が観察された。着色された下位尺度は、更なる分析の結果、受講前調査時から出院時調査時にかけて望ましい変化が観察されなかったものを示す。

- (1) 思考、感情、身体感覚などの私的出来事の頻度や内容を変えようとする行動で、心理的な問題を引き起こす要因の1つと考えられている。
- (2) その人が置かれた現状や出来事について、変化を求めたり、抵抗したりせず、その過程や状況を理解し、受け入れようとする姿勢のこと。

下「重点指導」という)を受けることとなります。

重点指導では、各年度二回程度、J-COMPASSを用いた中核プログラムがグループワーク形式で実施され、複数職員での指導体制、外部専門家の協力等、より充実した指導が展開されています。

三 効果検証方法及び結果

本効果検証では、標準プログラム(J-COMPASS)の効果を明らかにするため、二つの分析を行いました(図1)。

1) 分析①では、在院中の受講者に指導が目標とするような変化があったかどうかを明らかにし、分析②では、同指導が出院後の再非行の防止につながったかどうかを明らかにしました。

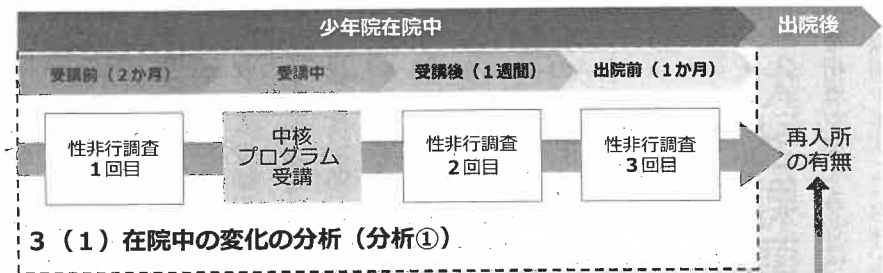
(二) 在院中の変化に関する分析(分析①)

ア 対象者

平成二九年一月一〇日から令和二年九月三〇日までに、全国の男子少年院においてJ-COMPASSを受講した者のうち、データ上の不備がない者一三二名。

イ 方法

少年院において性非行少年の問題性等を測定するために実施している性非行調査³⁾を使用し、対象者の入院後おおむね二か月が経過した時期(以下「受講前調査」という)、中核プログラム受講終了後一週間以内(以下「受講後調査」という)及び出院予定日の一か月前から出院日までの間(以下「出院前調査」という)の三時点の同調査の得点を比較しました。



3 (1) 在院中の変化の分析(分析①)

3 (2) 再入状況の分析(分析②)

図1 調査の枠組み

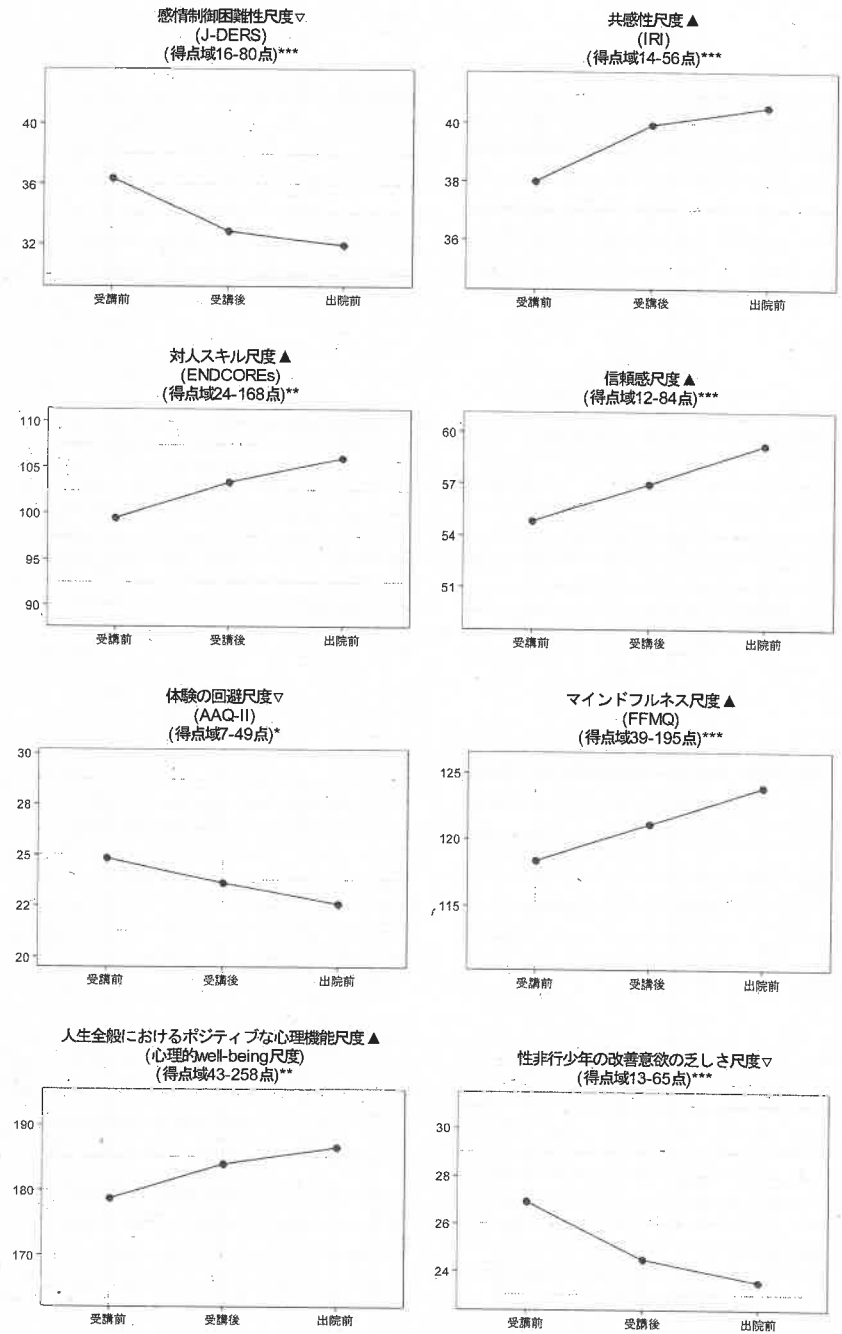


図2 在院中の各尺度得点の変化

図2の凡例：
 ▲得点の上昇が見込まれる尺度
 ▼得点の下降が見込まれる尺度
 *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

なお、性非行調査は、標準プログラム(J-COMPASS)の受講によって期待される効果のうち、性非行に間接的に影響する要因全般を測定しており、マインドフルネスを用いた指導による感情・欲求の制御力や心理的柔軟性の程度及び対象者が本来持つ力に着目した指導による自他に対する認知の肯定的な変容を測定することができるものとなっています。

ウ 結果と考察

(ア) 各尺度得点の変化(表(九五ページ)及び図2)

分析の結果、全ての尺度で望ましい変化が確認されました。

具体的には、標準プログラム(J-COMPASS)を受講することで、感情統制力、共感性、対人スキル、信頼感、改善意欲が向上し、体験を回避せず受け入れる姿勢やマインドフルな状態が身に付き、心理的に健康で前向きになるという変化が確認されました。

八つの尺度は、いずれも性非行に間接的に影響す

る要因を測定しており、在院期間を通じてすべての尺度が望ましい方向に変化していることから、標準プログラム(J-COMPASS)には一定の指導効果があつたと考えられます。

(イ) 各下位尺度得点の変化(表)

得点の変化を更に細分化して把握するため、上記の八つの尺度それぞれを、下位の尺度に分けその得点の変化を分析しました。その結果、二八の下位尺度のうち二〇の下位尺度において、受講前から出院前にかけて望ましい方向への有意な変化が確認されました。他方、悪化は見られないものの、一部ほぼ変化がない下位尺度がありました。変化のなかった部分については、後ほど課題として詳しく説明します。

(二) 出院後の再非行の防止に関する分析(分析②)

ア 対象者

性非行防止指導の受講の有無によって、出院後の再非行⁽⁵⁾を防止する効果が異なるかどうかを明らかにするために、同指導を受講した群(以下「受講群」という)

と受講しなかった群（以下「非受講群」という）を設定し、再非行による少年鑑別所への再入所率を比較しました。成人してからの再犯については、保釈や執行猶予等によって、その後の成り行きの情報取得が難しくなることから、成人するまで一年以上の観察期間が確保できる者（少年院出院時年齢が一九歳未満の者）に限定しました。

(ア) 受講群

平成二九年一月一〇日以降、全国の男子少年院において標準プログラム（J-COMPASS）を受講した者のうち、令和二年八月までに出院し、かつ、出院時年齢一九歳未満の者一〇一名。

(イ) 非受講群

特定生活指導が開始される以前（平成二五年一月一日及び平成二六年四月一日それぞれの時点）に、在院していた性非行少年のうち、出院時年齢が一九歳未満の者九五名。

イ 方法

出院後三六五日時点における、受講群と非受講群の少年鑑別所再入所率について生存時間分析を用いて比

較しました。

ウ 結果と考察

少年院出院後三六五日時点において、受講群の推定再入所率七・九%に対して、非受講群の再入所率は五・三%であり、両群間の再入所率は統計的には差がないという結果でした（図3）。これは、性非行少年は、元々その他の罪種の非行少年よりも再入所率が低いため、指導効果の差を再入所率の比較によって見いだしにくいことが考えられます。また、別の見方をすれば、成人するまでの間に限れば、性非行少年の再入所率自体が低い状態で保たれているとも言えます。

四 今後の課題

分析①の結果、在院中の受講者に総じて望ましい変化が見られました。しかし、下位尺度まで分析すると、一部に変化しなかったものもありました。これらの変化しなかった部分については、今後の指導上の課題として改善を図ることで指導効果の更なる改善を見込むことができる部分と考えられます。以下、下位尺度の分析結果か

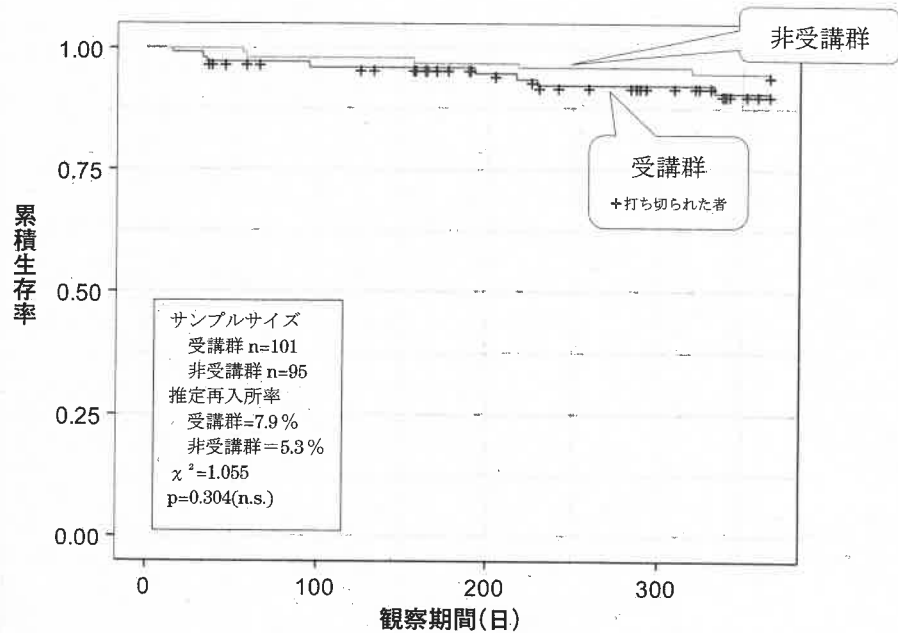


図3 受講群と非受講群の再入所率の生存時間分析結果

ら浮かび上がった課題について、二つの観点から考察します。

一つ目は、マインドフルネスについての観点です。マインドフルネスは、「今ここの経験に、評価や判断を加えることなく能動的な注意を向けること」と定義されています（Kabat-Zinn, 1994）。これを受けてマインドフルネス尺度は、「観察すること」、「反応しないこと」、「断しないこと」、「表現すること」及び「気付きながらの行動」の五つの下位尺度で構成されています。しかし、今回の分析ではこのうち、「観察すること」、「気付きながらの行動」の二つの下位尺度に変化が見られませんでした。これは、マインドフルネスの要素のうち、「今ここの経験」を能動的に観察する力や、「今ここの経験」である自分の行動を客観視する力については向上しなかった可能性を示しています。また、感情制御困難性尺度の下位尺度「感情受容困難」についても変化が乏しく、感情に振り回される傾向には改善が見られませんでした。標準プログラム（J-COMPASS）はマインドフルネスをベースとした指導ではありますが、現段階では、同プログラムによる、マインドフルネスの理解や実

践には更なる改善の余地があるものと思われまます。具体的には、指導者が再非行防止に係るマインドフルネスのメカニズムやその効果を十分に踏まえて指導に当たるとともに、在院者がマインドフルな状態を目指して生活できるような動機付けることなどが挙げられます。

二つ目は、対人スキルについての観点です。対人スキル尺度は、「自己統制」、「表現力」、「自己主張」、「解読力」、「他者受容」、「関係調整」の六つの下位尺度で構成されますが、このうち対人スキル尺度の「解読力」、「他者受容」、「関係調整」のほか、人生全般におけるポジティブな心理機能尺度（心理的 well-being 尺度）の下位尺度「積極的な他者関係」など、他者理解に関連する下位尺度には変化が見られませんでした。これらの下位尺度の項目は、「相手の考えを正しく読み取る」、「私は、あたたかく信頼できる友人関係を築いている」など、より現実的な対人関係に対する自覚が反映されるもので、具体的な対人コミュニケーションの実践によって身に付くとされる部分です。少年院在院中は、特定の他者との関係を深めるような機会が限られているため、指導において、ロールプレイや SST による練習機会を設けるな

どして、他者理解を深める働き掛けを充実させることなどが考えられます。

五 結び

今回の性非行防止指導における標準プログラム（J-COMPASS）の効果検証では、同プログラムが働き掛けの対象とする性非行に間接的に影響する要因について、いずれも望ましい変化が観察されました。また、マインドフルネスや対人コミュニケーショントレーニングの実践によって、より効果的な指導が展開できる可能性が示されました。

これらの結果については、少年院で実際に指導を行っている先生方の、日々の指導・処遇の積み重ねがあつて初めて、明らかにすることができたものです。本業務に携わった全ての方々、今も施設で指導・処遇に当たられている全ての先生方の御尽力に深い敬意と感謝を表し、本稿の結びとさせていただきます。

- (1) 例えば、強盗・強姦性交等、強制性交等、強制わいせつ、公然わいせつ、わいせつ目的略取等。
- (2) 指導方法として、マインドフルネス、性教育、個別面接・課題作文・読書指導は共通している。そのほかの指導方法として、標準プログラムでは、アンガーマネジメント、特別プログラムではアサーション及び SST が用いられる。
- (3) 本効果検証で使用した性非行調査の尺度名及び内容は表左側二列を参照。
- (4) 各尺度の下位尺度名は表三列目を参照。
- (5) 性非行以外の非行を含む全ての罪種を対象とした。
- (6) 非受講群については、全ての対象者が出院後三六五日を経過していたため、正確な再入所率となっている。

【引用文献】

- 藤本学・大坊郁夫(二〇〇七)。コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究、一五、三四七-三六一。
- Kabat-Zinn (1994). *Wherever you go, there you are: Mindfulness meditation in everyday life*. New York: Hyperion.
- Sugita, Y., Sato, A., Ito, Y. & Murakami, H. (2012). Development and validation of the Japanese version of Five Facet Mindfulness Questionnaire. *Mindfulness*, 3(2), 85-94.